



# 会報

第20号

平成4年2月

社団  
法人 北海道美術館協力会  
札幌市中央区北1条西17丁目 電話011-644-4025



北海道立近代美術館蔵

## 新収蔵品紹介 リベンスキーノ・ブリフトヴァ「頭 89」

中世以来のガラスの伝統を受け継ぎながらも、国をあげて新しいガラス芸術の発展に尽力してきたチェコスロvakiaの生んだ代表的作家に、スタニスラフ・リベンスキーノ、ヤロスラヴァ・ブリフトヴァ夫妻がいる。二人は鋳造によるガラス彫刻の先駆者として知られ、一方で数多くの後進を育ててきた。1950年代から制作されてきた大規模な記念碑的彫刻作

品群は、新たなガラス造形の可能性を示唆している。「頭 89」は、型の中にガラスをつめて加熱溶解し、時間をかけて徐冷して仕上げるキャスト技法による作品で、赤銅色のガラスに秘められた繊細な青色が光を通して浮かび上がる。斬新で象徴的な形態とあいまって、叙情的な美しさを漂わせている。

魅力的つ!!  
そうありたい

充実を目指す協力会事業



北海道美術館協力会は創立15周年を迎えます。この間の開催事業は、それぞれご意見を伺いながら実施してきましたが、会員の皆様や一般の方々からは多様なご要望等が寄せられます。今回は、これらの中から当面する事項について関係の各部長に答えてもらいました。

●本年度の婦人美術講座の受講申込は300人を越えたと聞いていますが、受講定員50人をもっと増やせないのでしょうか。それと、この講座はボランティア養成のためのものということになっていますが、その枠を外し男性も含めて美術に関心のある人に門戸を開放できないものでしょうか。

○関川節子事業部長

本年度は332人の応募がありました。出来るなら全員受講していただきたかったのですが、受講施設の収容能力からいって50人が限度となっています。また、同じ講座の回数を増やすということについては講師陣の確保を考慮しなければなりません。

また、美術館協力会は、ボランティアが中核となって活動している団体なので、當時一定数のボランティアを確保する措置を講じなければなりません。さらに必要な知識を習得してもらうことも必要になります。そういうことからボランティア養成ということで実施してきたのが婦人美術講座なのです。

しかし、美術に対する関心のたかまりを踏まえ少しでもご要望に応える方向で検討していくかなければならないと考えています。

●美術研修旅行は海外と本州府県を対象にやっているようですが、経済的理由や時間的余裕がないなどで参加できない人も多いと思います。道内には道立美術館のほかにも美術館や類似施設が沢山ありますので札幌圏から地方圏へ、地方圏から札幌圏へといった誰もが気軽に参加できる道内研修旅行を企画していただきたいと思います。

○関川節子事業部長

現在、美術研修旅行は海外と他府県の美術館などを対象とし原則として年1回実施しています。

道内の美術研修旅行については道立帯広美術館も出来ましたし、他の美術館等も増えつつあると聞いておりますので、誰もが気楽に参加できる道内研修の企画も大切なことだと考えております。

参加希望者の情報などを勘案しながら検討したいと思います。

●美術展や会の事業の情報がもっとタイムリーに欲しいと思います。会報は年に6回位発行してもらえば有り難いのですが。それと協力会の存在を知らない人が随分いるように思います。もう少し積極的なPR活動をしてはいかがなものでしょう。

### ○阿部三恵広報部長

会報は年2回、1,300部発行して会員の皆さんに送付しておりますが、これでは充分でないと思います。今後、予算や編集スタッフのことなども考えながら、発行回数の増について努力してまいりたいと考えております。

また、当会のPRについては本年度リーフレットを印刷配布してご活用いただいているところですが、さらに効果的な方法について検討することにいたします。

### ●「売店」というネーミングはもっと何とかならないものでしょうか。

それと価格表示とか他の貼り紙にも、美術館の雰囲気\_ADDRESSマッチさせる気配りに欠けているものが見られるように思います。

また、美術館に入ると受付の人も切符の係の人も制服姿です。その感覚で売店に行くと制服を着た人がいないので、販売を担当する人がどの人なのか戸惑うこともあります。

### ○相馬久子ボランティア部長

売店のネーミングについては、美術館にふさわしいもっと素敵なものはないかと常々話合っているところです。そして、そのネーミングに負けないショッピングの場でありたいと専門家を講師としての研修なども行っているところです。ご指摘のような表示もあったことと思いますが、今後十分気をつけながらネーミングについても考えます。

売店の販売は主にボランティアが担当していますが、活動中は胸に三角バッジを着用しております。お客様に接する姿勢をより研究しご不便をかけないようにしてまいりたいと思います。

### ●展覧会に来るたびに売店を覗くのですが新鮮味に欠けるような気がします。年に何回か展示替えをするとか、オリジナルな商品を開発するとか、動線に変化を加えるとかの工夫は困難なのでしょうか。

### ○相馬久子ボランティア部長

美術館の売店にふさわしい商品、限られた商品陳列ス

ペースといった中で店頭をフレッシュに保ことはなかなか至難なことですが、商品の配列に変化をもたせるなどの検討を重ねています。

オリジナルな商品についても、研究し、皆様が楽しくお買い物ができ、豊かな気持ちでお帰りになれる売店であるよう工夫してまいります。

### ●毎年「会員の集い」の案内をもらいますが、美術鑑賞やお話を後は一杯飲んでカラオケでもやるといった大衆的な雰囲気の温泉一泊旅行はいかがなものでしょうか。

### ○関川節子事業部長

「会員の集い」は道立近代美術館を借用しなやっている関係上、ホテルや一般の飲食店のようにはまいりませんが、出来るだけ楽しい時間を過ごしていただくように努力しています。しかし、まだ堅苦しい感じがあれば改善しなければなりません。宿泊を伴う「集い」については希望の状況を調査しながら検討しなければならないと思います。

### ●個人会員の年会費10,000円というのは少し高くありませんか。もう少し安くなる見込みはないのでしょうか。

### ○大萱生明総務部長

当協力会の場合、年会費10,000円のうち平均約66%が会員の皆さんに還元されております。その概要は、会員証利用による美術展観覧料の支払いが約42%、会報の印刷配布経費などが24%となっております。金額にしますと6,600円が会員還元、残りの3,400円が協力事業費や管理的経費等となっています。

大きな比率を占める観覧料は会員証利用による観覧に応じて主催者側に支払う仕組みになっており、利用率は年々増加の傾向にありますので今後この比率がさらに増えることも予想されます。

このような実態から、会員証利用に一定の制限を加える等の方途を講じない限り現在の年会費を安くするのは難しいと考えております。

# 美術館ニュース

## 北海道立近代美術館

開館15周年を迎える当館の平成4年度に予定されている展覧会事業を紹介します。

まず、「これくしょん・ぎゃらりい」として定着してきた館コレクションによる展覧会では、今年度も企画性を加味しながら、みなさんに楽しんでもらえる内容のものを予定しています。そのメインとなるのは、常設展示室全室を使った「パリの肖像」展（6月13日～8月25日）と、「北のイコロジー」展（8月30日～11月17日）。前者はエコール・ド・パリ、北海道ゆかりの作家、アール・ヌーヴォー、アール・デコなどの作品によって、19世紀から現代までのパリの風俗を紹介するものです。後者は、北海道ゆかりの作家の作品を中心に、その背景にある北のイメージや世界観の表われを探るもので。このほか、「語りかけるガラス」展、「屏風と掛軸の世界」展などが、5期に分けた会期中に開催されます。

特別展では、「日本のアーリズム1920s-50s」展（4月11日～6月7日）が新年度の皮切りとして開かれます。これは、大正時代から戦後に至る洋画に見られる、アーリズムの諸相を展望するものです。続く「イタリア未来派展」（6月13日～7月12日）は今世紀初頭にイタリアに起り、その後の世界の美術に大きな影響を与えた未来派の運動の全体像を明らかにするものです。夏から秋にかけては、アメリカのフィラデルフィア美術館の所蔵品によって、印象派から今世紀初頭までの多彩なヨーロッパ美術の流れをたどる「フィラデルフィア美術展」（7月18日～8月23日）、今世紀に世界の注目を集めたスウェーデンのガラス工芸の粋を紹介する「スウェーデンのガラス1900-1970」展（8月30日～10月4日）など、開館15周年記念にふさわしい内容の展覧会が開かれます。またアイヌ風俗を描いたアイヌ絵の世界を、初めて美術的側面から紹介する「蝦夷の風俗画」展（10月10日～11月15日）も、今年度の注目される展覧会といえるでしょう。



中原 実「暁の星雨」1930年

このほか初冬からは、北海道の現代の美術状況を新たな切り口で紹介する「北海道・今日の美術」展や、冬休みの絵画鑑賞入門展、「子供と親の美術館」展など、シリーズ企画展もこれまでどうり開催される予定です。

## 北海道立旭川美術館

北海道立旭川美術館は、今年の7月に10周年を迎えます。道立地方美術館の1号館として手探りの状態からあゆみを始めましたが、この秋には、念願であった常設展示室が増設されることになり、10周年に相応しく、更に充実した事業を展開する体制が整いました。

さて、平成4年度の旭川美術館の展覧会事業を紹介いたします。4月3日（金）から5月17日（日）までは「開館10周年記念所蔵品展」を開催いたします。旭川美術館は「道北ゆかりの作家の作品」と「木の造形作品」というふたつの収藏方針のもとに、この10年、作品を集めて参りました。本展は、いわばその成果を皆様に御覧いただくもので。そのなかには戸谷成雄、



小玉貞良「アイヌ盛装図」  
(稽古館蔵)

深井隆、神山明など今、最も注目されている作家たちの木の造形作品や砂沢ビッキの遺作など平成3年度に収藏した作品も含まれています。5月23日（土）から6月28日（日）までは「黒田清輝展」を開催いたします。記念切手にもなった「湖畔」で有名な黒田清輝は、ご承知のとおり、日本の近代洋画壇の礎を築きました。本展は、その「湖畔」をはじめ黒田の主要作品を所蔵する東京国立文化財研究所から油彩59点、デッサン・写生帖67点をお借りしてこの明治の巨匠の全貌をご紹介するものです。「ミレーとバルビゾン派の画家たち」（7月4日（土）～8月16日（日））を開催した後、8月23日（日）から9月27日（日）までは、当館の企画による「蝦夷の風俗一小玉貞良・蠣崎波響から平澤屏山まで」を開催いたします。本展は、アイヌの人々の風俗を描いた、いわゆる「アイヌ絵」を紹介するもので、従来、民族学的見地から語られる事が多かったこうした作品を、改めて美術史的に見つめ直そうとするものです。

秋以降には、「生誕100年記念 木内克展」「はこで考える—あそびの木ば箱'92」などの展覧会が企画されています。とりわけ「あそびの木箱」は当館が5年ごとに開催しているコンペ形式の展覧会で、今回も全国の工芸家やデザイナー約50名から、創意と遊び心豊かな木箱が出品されることが期待されます。本年も皆様のご来館を心からお待ちしております。

# .....美術館ニュース

## 北海道立函館美術館

当館の平成4年度の展覧会計画を紹介します。

まず、4月4日から5月17日までは、「アルフォンス・ミュシャ展」をおこないます。ミュシャはチェコスロバキアに生まれ、パリで活躍した画家・装飾芸術家です。東西の造形要素を取り入れた華麗なスタイルでポスターなどを手掛けて、アール・ヌーボーの頂点を極めました。本展では、油彩、リトグラフ、アクセサリーなど約260展で、ミュシャ芸術の全貌を紹介します。

6月27日から8月2日にかけては、「アンリ・ルッソと素朴派展」を行います。19世紀末から今世紀初頭にかけて、アカデミックな美術教育や画壇とは無縁に、自己のヴィジョンを忠実に描いた画家たちを総称して、素朴派とよびます。この素朴派の中で、代表的な作家がアンリ・ルッソです。ルッソは簡潔な形態と鮮明な色彩で、独創的な世界を描いています。本展ではルッソのほか、セラフィーヌ、ボーンシャンなど素朴派の画家たちの傑出した作品を集めて展望します。

8月9日から9月20日の間は、「長崎の美術・300年展」を開催します。この展覧会は、港町函館の文化を考える上で、他の港町の文化を比較しようという試みで、平成元年度の「南蛮・ハイカラ・異国趣味」の神戸に続くものです。江戸時代、日本唯一の貿易港であった長崎ならではの、オランダ、中国関係の美術工芸品や貿易資料などを展示し、その特色を探ります。

また「戦前の抽象絵画展」(9月29日～10月25日)では、戦前日本の抽象絵画の全体像を展望「あそびの木箱'92展」(1月5日～1月31日)は、旭川美術館との共同企画で、箱をモチーフとした木工芸の展覧会を、コンペ形式で行います。



アルフォンス＝ミュシャ  
「夢想」1897年

このほか、「金子鷗亭とその一門展」(5月23日～6月21日)、「バスキンとエコール・ド・パリ」(10月31日～12月6日)、「北海道・今日の美術」(2月6日～2月28日)、「昭和の函館画壇展」(3月6日～3月28日)も予定しております。

## 北海道立帯広美術館

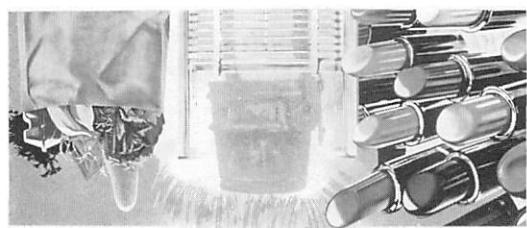
昨年9月に開館した帯広美術館は、年末までの観覧者総数が延88,400人を数えるなど、順調な滑り出しを見せています。話題の多かった開館の年に引き続いて、平成4年度も多彩な展覧会を開催します。

コレクション・ギャラリーの第1期は、「新収蔵品展」(4月4日～6月28日)として「道東の美術」と「プリントアート」の二つの収蔵方針に基づいて集められた平成3年度の作品の中から代表作を初公開します。第2期(7月4日～9月13日)ではミレーやドービニーなどのエッチングを中心にバルビゾン派の作品を、第3期(9月19日～12月22日)では神田日勝、能勢真実など十勝ゆかりの作家の作品を、第4期(1月5日～3月28日)では日本の現代ポスターの代表作を紹介します。

一方、特別企画展は、神話と宗教をテーマにした「聖なるイマージュ」展(4月4日～5月10日)を皮切りに、帯広ゆかりの作家展として「矢柳剛展」(5月16日～6月28日)を開催。続く「近代洋画の父 黒田清輝展」(7月4日～8月9日)は、東京国立文化財研究所の所蔵作品により巨匠・黒田清輝の全貌を紹介するものです。

当館初の日本画展として期待されるのが「山種美術館所蔵品展」(8月14日～9月13日)で、優れたコレクションで知られる同館の作品の中から約70点を精選し近現代の日本画の流れを概観します当館のポスター・コレクションに関して開らかれる「ロートレックとボナールのパリ」展(9月19日～11月8日)は、アメリカ・タフト美術館の所蔵作品を中心としたポスターと版画によって、ベル・エポックのパリの雰囲気を伝える展覧会です。

「世界のユーモアカップ展」(11月14日～12月22日)の後、年明けに開かれる大型企画展「ケネス・タイラーとアメリカ現代版画展」(1月5日～2月28日)は、ジャスパー・ジョーンズ、ローゼンクイストなど20作家の作品により、タイラー工房の足跡をたどるものです。年度末の「北海道・今日の美術」(3月6日～3月28日)と合わせて現代の美術動向をうかがう格好の機会となりそうです。



ローゼンクイスト「火の家」1989年

## .....美術館ニュース

### 北海道立三岸好太郎美術館

平成4年度は、旧道立美術館から改称し三岸好太郎美術館として新たに開館してから15周年をむかえます。この間昭和58年には現在地に新館を建築、移転し、所蔵作品の常設展示のほか、さまざまなテーマにより三岸の画業をとらえた特別展、またコンサートなどの普及事業など、多岐にわたる活動を行ってきました。今後も当館にふさわしい活動を続けていくつもりです。

さて4年度の事業から、まず15周年の記念展として企画された特別展「三岸好太郎と三岸節子展（仮称）」を紹介します。（6月27日～8月6日）

1905年愛知県尾西市に生まれ、女子美術学校に学び、画家仲間を通じて好太郎と知り合って1924年に結婚した節子夫人は、女性画家の先駆的存在として苦難の道を切り開きながら力強い製作を積み重ねて、現代日本の代表的な画家として活躍を続けています。これまで当館を訪れる観覧者の中にも、節子夫人の作品を見たいという方は非常に多く、また、夫人を通して好太郎の名を知ったという人も少なくありません。

二人が画家として夫婦として共に暮らしたのは、好太郎の死までのわずか10年あまりに過ぎませんが、二人の芸術家の魂の触れ合う、短いけれどもきわめて重要な10年であったといえるでしょう。このたびの展覧会では、創作に情熱を燃やした二人の芸術がどのように関わりあい、また各々展開していくかを、二人の初期からの代表的な作品数十点により御覧いただくものです。二人の作品がこれだけの規模で一同に展示されるのは初めてと

いってもよく、本展はまたとない鑑賞の機会となることでしょう。

このほか秋の特別展、いろいろなテーマによる小コーナーを設けた所蔵品展、コンサート、ミニリサイタル、中学生むけの企画〈たんけん美術館〉などを行います。より多くの方々に、好太郎の芸術と美術館に親しんでもらえればと思っています。



三岸好太郎「赤い肩かけの婦人像」1924年 結婚前の節子夫人を描いたもの。

### 財団法人札幌彫刻美術館

平成4年度の特別展示として、8月27日（木）から10月18日（日）まで「第6回北の彫刻展」を開催します。本展は、北海道に在住し活躍中の彫刻家を紹介し、発表の場を提供することを趣旨として開館以来隔年で開催してきました。出品作品に対しては、各作家が制作にあたり基本としているテーマを尊重し、表現の手法や材質の選択を作家に一任しているため、回を重ねるたびに作家の意欲的な作品が出品され、新鮮な印象を与えてくれます。「北の彫刻展」は、道内の立体造形における現状の一端を総合的に紹介する場として定着しつつあるようです。

当館所蔵品による常設展では、生涯モニュマンタルな彫刻作品を制作し続けた札幌出身の彫刻家本郷新の彫刻作品を中心に、絵画・制作道具・日用品を展示します。開催期間は4月から8月23日（日）までをⅠ期とし、特別展終了後の10月22日（木）から翌年3月までをⅡ期として展示替を行います。各期間中は、所蔵作品の中から設定されたテーマで、各展示室を構成します。同時に、本郷新のコレクション展として、ピカソのリトグラフ31点を一挙に公開する予定です。

その他の事業として、友の会と共に「彫刻めぐり」を予定しています。去年は、札幌市内、帯広・釧路方面、イギリス・スペイン方面に足をのばしました。



砂漠の女 本郷新 1970年製作

## ミニ情報コーナー

### ボランティア養成講座中盤に入る

新年度のボランティア部入部を目指して、売店部門14人・解説部門3人・資料部門10人の受講生は、それぞれ専門的な研修に取り組んでおります。閉講は3月の下旬ですが、もうひとがんばりです。みなさんとともに声援を送りましょう。



売店部門の実務研修

### 意欲的なプロジェクトチーム

昨年、ボランティア部売店部門に部員7人の構成による売店プロジェクトチームが誕生し、売店づくりや商品の検討などを行なっていますが、当面オリジナル商品の開発に取り組んで日々発売に漕ぎ着けよう頑張っています。

### 盛んな会員証の利用

特別展などに会員証を利用しての観覧が盛んで、金額的にみますと400万円をオーバーしています。次の表は近代美術館の特別展の利用状況で、この他コレクション・ギャラリーや地方の美術館でも利用されています。

#### 特別展会員証利用観覧状況

( )内は上記数値の内数で同伴者組数

展覧会名	法人会員	個人会員	賛助会員	合計	展覧会名	法人会員	個人会員	賛助会員	合計
ピカソ版画展 4/6~5/5	79 (25)	498 (153)	39	616人 (178)組	写真のエコール・ド・パリ 8/31~9/29	24 (7)	283 (73)	23 (80)	330人 (80)組
田辺三重松展 5/9~5/30	45 (11)	504 (153)	13	562人 (164)組	近代日本画の花鳥 10/5~11/24	94 (33)	1,035 (330)	15 (363)	1,144人 (363)組
スペイン絵画展 6/5~7/7	371 (144)	1,295 (448)	46	1,712人 (592)組	子どもと親の美術館 1/5~2/2	10 (1)	165 (50)	6 (51)	181人 (51)組
世界現代ガラス展 7/14~8/25	46 (13)	567 (189)	30	643人 (202)組	合計	669 (234)	4,347 (1,396)	172 (1,630)	5,188人 (1,630)組

### ボランティア美術品を寄贈

#### 新年度にむけて各部動く

新年度の事業計画や予算編成にむけて各部長が当面する懸案事項を協議、具体的な検討に入りました。会員拡充、美術館への協力、組織の運営、各種事業の検討、広報活動、商品開発、収益事業のあり方等々課題は山積していますが、それぞれの役員の意見を聴取するなど魅力ある会に発展することを願って意欲的に取り組んでおります。

昨年12月、ボランティア有志一同が北海道立近代美術館に本田明二さんの作品「自画像」ほか5点(260万円相当)を寄贈し館長より感謝状を受けました。



## 海外美術研修旅行

### ドイツ・オーストリア・スイスに美を訪ねて

長 淵 文 枝



1991年10月24日、私たち“美の探訪”一行33名は、成田を午後1時出立した。やがて「シベリア上空を航行中」と放送が入り、私は第2次大戦後数万の日本兵がダモイを夢みながら異国の土になったことを思い、

しばし瞑目して平和の有り難さを心に刻んだ。

成田→フランクフルト11時間、時差8時間で夕暮れの空港に着陸。ローテンブルクに向った。闇の中に中世の門がみえ、入るとそこはメルヘンの国に迷いこんだよう。素敵なホテルでヨーロッパでの第1夜を睡り、翌朝は〈中世の宝石〉といわれるこの古い街を巡って楽しんだが、先の大戦で激しい爆弾を受け再建したという。

ミュンヘン バスが街に入り私は驚いた。こんなに伝統的建造物が整然と保存され、品格ある街並みを形成しているとは！ 戦禍に遭いながらも復興の美事なこと一文化財保護に対する情熱と努力に感動した。先ずアルテ・ピナコテーク見学。いよいよ本物に接して、学芸員の井内先生の説明を受け、彪大な名画に感心した。次でレンバッハ美術館でカンデンスキー等のキューピズムやフォーヴィズムの絵を解説して頂きながら鑑賞。翌日はノイエ・ピナコテーク見学。こちらは新しい絵が集められており、両方で美術史美術館となっている。

美しい田園風景の中、バスで国境を越えた。

オーストリアのザルツブルクも、街全体がMuseumといっていい素晴らしい所である。この日は第2次大戦後の四国分割統治からの独立記念日で、やはり甚大な戦禍から復興した。私は大聖堂で聖歌隊の練習にゆきあい、その響きの透明な美しさに大感激。2ヶ所の美術館も興味深かった。モーツアルトの生家はごく質素なアパートであった。200年前と思う。

フライトでスイスに入り、先ずルツェルンへ。素晴らしい美しい。スイスはどこへ行ってもエメラルド色の川・湖水。豊かな樹木はちょうど黄葉の季節、品のいい街並みとともに嘆声しきりであった。カペル橋・悲しみのライオン等スイスの歴史にふれる観光をした。

チューリッヒの美術館も充実しており、特にスイスの画家の絵に力を入れている。私はフラウミュンスター聖堂を飾るシャガールのステンド・グラスの美しさに魅せられた。バーゼル・ベルン・ジュネーブとそれぞれ立派な美術館、趣のある街に嬉びを新たにしていった。

ジュネーブでは、森の中に点在している感じの国連関係の建物を、いくつかみて回ったことも忘れ難い。最後の美術歴史博物館は画家の他、先史時代からの貴重な発掘品・またアンティーク家具・陶器・染織物・兵器等々質量ともに見応えがあったが説明文を読めないのが残念。

旅行中、美術館や街頭でみかけた子供たち青少年の表情が生々していたのが印象に残っている。

楽しい時は直ぐ過ぎ去る。10日間の旅は終わった。

初参加の私にとって、本物の美術・建築物・風景に接して期待以上に感銘を受け、充実していたがいささかハードだった。また国民性の違い、文化政策の落差を痛感させられた旅でもあった。ご指導下さった井内先生の豊富な学識・適切な解説に敬意と感謝を申し上げたい。最後になったが、鈴木団長様はじめ皆様の和やかな雰囲気の中で、楽しい旅をさせていただき幸せでした。お礼を申し上げ、拙いペンを擱きます。



ルツェルンのカペル橋

### 海外美術研修旅行

# 美の探訪の旅の思い出

茂木 通



今回の旅は一行17名10日間3カ国8カ都市と11の美術館を訪ねるものであった。その思い出を駆け足で書いて見ます。

最初に泊まったのがローテンブルグで、朝起きると「グーテン・モルゲン」（お早やよう）ああドイツに来たのだと思う。ここは1945年の空襲で塔や建物3百余件が破壊されたが、いち早く復元した。タウバー河に架けられた橋は二重橋で東京を思い出させ、市街を歩くと広場とか塔や門もあり我が家が身がすっぽり中世の世に戻った感がした。

十数年前に来たことのあるミュンヘンは懐かしく、12時になると人形が飛び出し踊る仕掛け時計がある市役所の旧庁舎があり、スナップも沢山とった。1日に3カ所の美術館を見ることは並大抵ではなかったが、われわれはこれをこなした。

オーストリアのザルツブルクはモーツアルト生誕地だけあってホーヘンザルツブルク城や昔の厩は音楽会場として活用されている。モーツアルトの生家には彼が生前弾いたヴァイオリンやヴィオラや生前弾いたと同型のピアノ（鍵盤黒く黒鍵白し）も保管され我々は歓迎するかのようにトルコ行進曲を弾いてくれた。商店街の看板は文字はなく凡て絵で示されていた。例えばブドウは酒屋、秤は薬屋である。

アルプスは白く輝き湖は蒼く木々は紅葉し美しい街ルツェルンで最初に訪れたのは「瀕死のライオンの像」である。これはスイス兵が悲惨な戦にめげず勇敢に戦ったことを稱え巨大な岩に彫ったものである。丘の上のシャトー・グッチに登ると眼下に市街が拡がり素晴らしい眺めであった。大きな木造のカッペル橋を渡りながら騎士と貴婦人が手をとり歩む姿を思い浮かべた。ピカソ美術館ではピカソの絵が年代順に並べられ、めまぐるしく変化する画風に驚いた。

壯厳な憲院は市の中心部を占め、宗教の力の強さをひしひしと感じさせる。バーゼル美術館には3千点の絵画が収納されわれわれの目を見張らせた。

秋たけなわのチューリッヒにはノーベル賞受賞者21人輩出したというチューリッヒ工業大学があり、冬祭りを迎える街には仮装した人々が行き来していた。

スイスの首都ベルンは6糠に及ぶアーケードがあり、塔には仕掛け時計があった。鳥が鳴き熊が歩き、王が確かめ鐘が鳴るという仕掛けである。

レマン湖を抱え風光明媚なジュネーブはまた国際都市でもありI・L・Oや彼の松岡洋祐が国際連盟脱退の大見栄を切った国連本部（今はアメリカに移転）等の国際機構が多く国際会議は年中行われている。嬉しかったのはプチ・パレ美術館で藤田の「ライオンと女」やキスリングの「赤いセーターの女」の絵を見つけたことである。われわれはしばしショッピングを楽しんだ後銀杏の枯葉が散り敷くジュネーブ大学構内を歩き「宗教改革の像」を見た。

かくて十日間の旅はあっという間に過ぎました。それでは私もこれでお別れといたします。アウフ・ヴィーダー・ゼーン（さようなら）



ローテンブルグの街

## 会員の動き

新入会員紹介

会員に加入いただき有り難うございました

(平成3年7月から12月までの入会者)

# ESSAY

## イタリアの美術館めぐり



熊野 博之

早いものであれから一年、去年の今頃はイタリアにいたのだと感慨深い思いがします。テレビ、雑誌などでフィレンツェの文字、絵を目にするとつい懐かしく、ウフィツィ美術館を走り回って見たことを思い出しています。

今回の旅行は室内に美術館めぐりツアーパンフレットで無理強いされ、約十年振りのヨーロッパ旅行となりました。事前に百科辞典その他で少しは付け焼き刃の勉強をして出向いたつもりが、絵の氾濫で興奮してしまい、ただ走って眺めたという感じでもう少し時間が有つたら、更にはもっと見るべき所が有つた「しまった」と残念に思っています。この思いは、いつの旅行後にも持つものではあります。それでもテレビ、雑誌にイタリアの絵画が出てくるとこれはナマで見たぞという自己満足で一人悦に入り、井関館長はじめ旅の仲間の方々のことなど楽しく思い返しています。

今頃はイタリアにいたのだと感慨深い思いがします。テレビ、雑誌などでフィレンツェの文字、絵を目にするとつい懐かしく、ウフィツィ美術館を走り回って見たことを思い出しています。

先日NHKテレビ（日曜美術館）が、「ルネサンスのあけぼの」と題して、ジョットをとり上げた。最近これほど気を入れて見た番組はない。ビデオで再生してみているが巻き

ない。

一昨年参加した北イタリア美術の旅のことをしきりに思いだす。旅の最終日ローマ空港に向かうバスの中で、旅の団長だった井関館長がこんなことを話された。「アッシジのサン・フランチエスコ聖堂では、せつ

かくの壁画を前に、説明役の神父さ

んはジョゼットのエピソードばかり

話して、どんな風に表現したかに触

れなかった。残念だった」と。よい

手な題材でした。ある時私の師に、

静物をかくのでは無いスタイル・

ライフをかくのだ、と教えられて、

私が絵を求め続けてきたものは、ま

さしくこれだと思いました。四十数

年前の自分と現在の私が一線上に結

びつきました。『スタイル・ライフ

』静かなる場所、時、生活、そして人間。自分を見失いそうになる時、この言葉を呪文のように、心の中

づぶやいています。

幼い頃を想い返してみると、病弱の母の側らでじっと、ラジオに耳を傾けてクレバースをにぎつて自分の姿が見える。ラジオがある情景を語っている。その情景を絵にしてごらんなさいと、アナウンサーの声…。毎週日曜日の午前中でした。

そのセピア色の小さな、真摯な私

の姿がいじらしい。

それから四十年余り時が経ち、何

度かの私の転機の折りにも、絵具箱

は私の側におりました。

『スタイル・ライフ』絵のモチー

フの中でも私にとって『静物』は苦

いから、多くの絵と向き合うことで、

安らいだ気持ちになれる時を、大切

にしてきました。

ともすれば沈みがちな心に、はずみをつけてくれる絵との出会いもあ

りました。夕日のくれないに、幼い

日々の遠い想い出を重ね、過ぎ去りし

日々に想いをはせるのも楽しいひとときでした。

## 時をおいて



中川 悅子

## スタイル・ライフ



佐々木桂子

## やすらぎをもとめて



外山 君子

“カミュー・コロー”の「モルト・フォンテームの思い出」それは、詩的なヴィジョンをもち、微妙な光りの変化がモノクロマティックで、その静寂で叙情的な絵を前に、心の視野が狭くなっていた学生時代、その作品に心静かに観照させられ、不思議な力が湧いてきて心豊かになったのを覚えています。

感動的な思い出深い作品との出会いから、多くの絵と向き合うことで、安らいだ気持ちになれる時を、大切にしてきました。

ともすれば沈みがちな心に、はずみをつけてくれる絵との出会いもありました。夕日のくれないに、幼い日々の遠い想い出を重ね、過ぎ去りし日々に想いをはせるのも楽しいひとときでした。

四季おりおりの旋律的な色調に染まる美術館前庭の樹々を眺めつつ、多くの偉大な作品を鑑賞できることがこの上もない幸せです。



## “踊り出た7人のサンタクロース”

第9回「会員の集い」は210人の参加者を迎えた12月6日北海道立近代美術館で開催されました。当初243人の出席申込がありましたが、30人以上の欠席者がいたことは残念でした。

講堂では、会長の挨拶の後当会が共催し多くのボランティアの皆さんに参加したミュージアム・スクールについて、スライド映写しながら相馬ボランティア部長より事業の報告がなされ、引き続いだミュージアム・スクールで実施した絵本シアター「パリの日本人画家フジタ・ツグハルト」とコンサート「絵画を愛した音楽家・音楽を愛した画家」が紹介されました。

ロビーに会場を移してのパーティーでは、会員の田畠千廣さんが演奏するエレクトーンを聞きながら三三五五テーブルを囲み、バラエティーに富んだ料理に舌つづみをうって歓談のひとときを過ごしました。

会員の皆さんに子どもにかえってジャンケン・ゲームを楽しんだ後、2階から7人のサンタクロースが踊り出してそれぞれのテーブルを回り、ひとりひとりに少し早いプレゼントが渡されると、あちこちに歓声が湧き和やかななかで「集い」は終わりました。

昨年もそうでしたが、今年もまたこの事業の企画や実施に当たって多くのボランティアの暖かい協力がありました。また、ゲームの司会は財団法人札幌市青少年婦人活動協会、プレゼント用品については関係業者、エレクトーンについては多米楽器商会からご協力をいただきました。紙面をかりてお礼申し上げます。



### 会話を拾う

#### ● まもなく会員増

「たいしたものだ、新入会員は200人を越えたよ。だけどねー、実質増は80人なんだ」

「ということは、退会者120人ということ？」

「そうなんだ。新しい会員が増えても、その60%相当の既会員が退会してしまう」

「原因は何なのかねえ」

#### ● 性の差別

「男性だって、美術館ボランティアしたい人はいるだろうねえ」

「それはいるだろう」

「ボランティア養成のための婦人美術講座というのは、差別じゃないかい」

「ボランティア部員が女性だけのグループだからじゃないの」

「門戸を開放しないというのは、やっぱり差別だろうね」

#### ● 売れ行きの弱い図録

「北海道は、美術展のカタログ（図録）購入率が低いそうだね」

「東京あたりの半分くらいしか買われないらしいよ」

「カタログは美術館にとって、命とまで言われているのにねえ」

「押し売りするわけにもいかんしなあ。文化土壤の問題かな」

「その土壤を肥沃なものにしていくことしかないかな」

#### ● カレンダー完売

「協力会が製作したカレンダーが完売されて品切れというのは、はじめてのことじゃないの」

「そう、はじめてのこと。それにしても帯広と函館で札幌の何倍も売れたというはどういうことなんだろう」

「札幌人は、好みが違うということだろうか。お客様のニーズを掴むというのは難しいねえ」